多御座候由申聞候。若騒動も出來仕候ては如何敷奉存候間、無用之夜行無之、提灯燈不申徘徊不仕様に、一統可被仰渡哉と申上候。以上。

五月廿七日　　高畠木工

前田對馬守様

別紙高畠木工紙面之寫相越之候條、被得其意、無用之夜行等、且又向闇夜提灯燈不申徘徊不仕様に、家來末々迄申渡候様、組・支配之面々に可相觸候。組等之内裁許有之面々は、其支配にも相達候様被申聞、同役中可有傳達事。

右之趣可被得其意候。以上。

（延享元年）六月四日　　横山大和守

頃日淺野川・犀川兩橋邊并河原、其外町方小路々々共凉に罷出申男女多、不作法之躰有之、河原等において躍申様成儀も相聞候。依之盗賊改奉行等手合之足輕相廻し、右族之者有之候ば、急度相咎候様申渡候條、被得其意、家來末々迄申渡候様、組・支配之面々に可被相觸候。組等之内裁許有之面々は、其支配にも相達候様被申聞、同役中可有傳達事。

右之趣可被得其意候。以上。

（延享三年）六月二十二日　　前田對馬守

## 九〇　御精進日諸殺生停止之儀觸

御家中之人々諸殺生、御精進日には相慎申儀勿論之事に候得共、末々之内には心得違候族も有之候哉、殺生裝束にて往來之者も相見え申由に候。居屋敷などの内、高はご上げ候人々も有之候。且又川殺生も右に准じ、心付も無之躰に候。歴々之面々茂家來は不慎之者も有之候様子に候。ケ様之儀は、不申觸候共嚴重に相心得可申處、右之族不慎之至に候條、急度相心得候様、組・支配之人々家來末々迄被申渡、組等之内裁許有之人々は、其支配にも相達候様被申聞、同役中可有傳達事。

右之趣可被得其意候。以上。

（延享三年）十一月十一日　　奥村助右衛門

## 九一　妾を妻に仕候事停止之儀觸

御家中之人々妾を妻に仕候儀、唯今迄年寄中に相達置候分は可爲其通候。是以後は右之族無之様に被仰出候條、被得其意、組・支配之人々に可申聞置事。

（延享四年）卯十一月

右之通御用番前田對馬守殿諸頭に被仰渡。

## 九二　越中境關所過書之儀に付觸

私支配越中境御關所罷通候もの、或前髪立・惣付髪或法躰之者、其品前々より通手形に書記持參仕來候處、支配頭等に斷洩申者も御座候躰にて、其品不書載過書持參仕者も御座候に付、御關所に指向候得ば何廉僉議仕、与力御番人等より斷に及候砌、右之旅人相返候而は殊之外難儀仕候故、同道人等より口上書取、猶更相改相通候儀も御座候得共、第一廿歳以下之前髪立等は、人により男女之差別難見分、紛敷者も御座候に付、御關所格合を以相改候趣に相成候得ば、僉議之内日間取、旅人別而難儀仕候間、惣而異躰之者は、其品通手形に書記候儀、不相洩様仕度奉存候。

一、地・他國之出家法師等、いづれ町・御郡に不限寺庵に相暮候もの心得違、其所之奉行之過書任手廻持參仕族も前々有之躰御座候。支配違之過書故難通、相返候得ば其時に望以之外難儀仕躰御座候間、是以後右躰之儀無之様に仕度奉存候。所詮以前は如何様に御座候共、右兩様之趣向後相違不仕様被仰渡可被下候。此旨富山・大正持御役人にも被仰達可被下候。以上。

（寛延元年）戊辰十一月十一日　　和田權五郎

前田大炊様

別紙之趣被得其意、組等之内裁許有之面々にも被申聞、尤同役中可有傳達事。

右之趣可被得其意候。以上。

（寛延元年）十二月八日　　奥村助右衛門

## 九三　越後屋敷式日作法之儀觸

越後屋敷、式日・平日共諸役人御臺子際に溜り罷在候。向後は御用對談相濟候ば、席々に退罷在候様に可申談旨、御用番對馬守殿被仰渡候條、右之趣御承知被成、御同役中御傳達可被成候事。